

対象学年・単位：各学年で1単位ずつ

企画担当：企画部

授業担当：全教員が担当

学校data

1873年創立／普通科／生徒数 951人(男子486人・女子465人)／進路状況(2014年度実績)大学205人・短大2人、専門学校等3人・就職1人・進学準備106人
★平成27年度SGH指定校

鳥取西高校(鳥取・県立)

Report 05

多様な人々や事象とのかかわりの中から
社会で役に立つ学び方を学び、
課題発見探究型の「知的総合力」を高める

「知的総合力」を高める
協同的な学びへの舵取り

鳥取西高校は2013年から、「総学」の時間で「思索と表現」という課題研究を実施している。以前は「読書と小論文」という活動で、教科指導だけでは培うことができない知力や表現力、総合的な思考力の育成を図っていた。しかし、課題図書が教員が選定し、生徒個人で行う取り組みだけでは、主体的な学びにはなっておらず、個の力を広げるには十分ではないかという議論が教員間に出始めた。

「そこで『協調学習』などの協同的な学習を取り入れ、『総学』を生徒がそれぞれの興味に応じてさまざまな分野の探究をする、課題解決型の『思索と表現』に変えることとしました」(山本先生)

従来のように知識をもつだけではなく、課題を発見し、思考を深め、問題を解決し、意見を発信する力が求められている。それを「知的総合力」と呼び、協同的な学びを通じて「知的総合力」を高めることを教育理念としている(図1)。

「思索と表現」の導入初年度と、2年めの昨年度は、グループ活動に多様性を

取り入れるために、全学年縦断で各学年から2名ずつ、6名1班のグループ分けでスタートし、学年を超えるインタラクティブな期待をした。しかし、生徒に行ってきた。1年生は基礎力がなく自発性はまだまだ低いもの、上級生と協同できることに喜びを感じ、3年生はリーダーシップをとれることに満足度を示していたが、そこに挟まれる2年生の立ち位置が中途半端になっていたようだった。

そこで、本年度から、課題研究は2年生と3年生の縦断班活動とすることとし、1年生は協同的な学びやグループディスカッション、課題設定のスキルを身につける基礎力養成のクラス活動とした(図2)。

「外に出る」ことで、生徒が課題を見つけやすくなる

「思索と表現」の授業がスタートして3年めの今年、同校はSGHの指定を受け、課題研究の学校統一テーマを「グローバル化の中の地域創生」と設定した。SGHの指定を受けることで、生徒の視点がグローバルになるだけでなく、課題研究のテーマ設定がしやすくなったそうだ。

鳥取西高校の「総学」の位置づけ (SGHの概要)

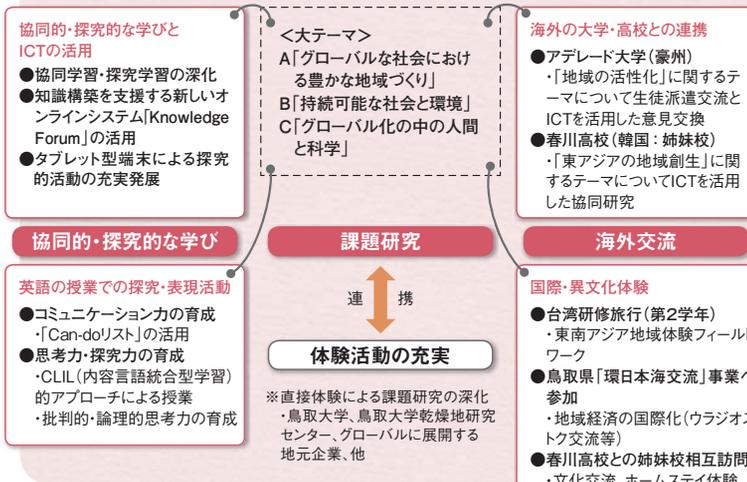
SGH課題研究「思索と表現」

育成を目指す人物像
地域・世界とつながり新しい価値を創造するグローバル・リーダー
知的総合力を身につけ、地域や世界のコミュニティに主体的に参画し、多様な他者と協同して課題解決に向けて探究するとともに、グローバルな視点で新たな可能性や価値を見だし、社会で積極的に行動・実践できる人材

学校統一テーマ：「グローバル化の中の地域創生」

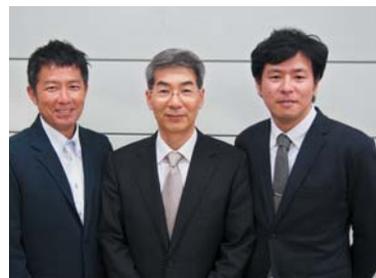
協調型プロジェクト学習「思索と表現」

※全校生徒で実施、学年を超えた縦割りグループ活動



「生徒が自ら課題をみつけれられるようになるのが一番ですが、簡単ではありません。昨年までの統一テーマは『10年後の世の中をよりよくするためにできること』としていましたが、テーマが広すぎてグループ内で想いを共有化することが難しかったようです。我々教員も、生徒が

課題を設定しやすいテーマの大きさを決めることは困難な作業のひとつです。SGHになったことで、グローバルと地域というくりができました。生徒の興味関心でテーマを出しやすくなるために、今年からは3つの大テーマを設定し、さらに教室単位で18の中テーマに分類、生徒



写真左から
教育企画主任
川原一浩先生
副校長
山本英樹先生
企画部長
林 耕介先生

取材・文／長島佳子



班活動は学年縦割りで行う。2年生と3年生が2・3名ずつで1班を形成。

有志の生徒が他校の生徒と作成した地元情報のフリーペーパー。



研究の成果はポスターセッションで発表。外部にも広く公開し、講師などから評価を受ける。

図2 「思索と表現」の年間プロセス(2015年度)

	1学年	2学年	3学年
前期	【基礎力養成(クラス活動)】 目標：批判的思考力を育成する	【縦割り班活動】 目標：ポスター作製の主体となる 目標：班をリードし論文作成の主体となる	
	4月 オリエンテーション 協同的な学びを体験	テーマの推敲と5月6月の研究計画を立てる中テーマ、小テーマに沿った関連資料の収集、探究活動	
	5月・6月 課題文の読みの手法	探究活動(必要に応じてICTを使った交流活動やフィールドワークを行う。鳥取大学等の外部連携者による助言を受ける)	
	7月 批判的思考の基礎力育成月間 ポスターセッション見学	ポスター作製集中月間 ポスターセッション実施	論文作成集中月間 広く公開し、外部連携者による評価を受ける
後期	【基礎力充実】 目標：要約する力を育成する	【思索の深化と論文①の作成】 目標：論文作成の基礎力をつける	【個々の進路に合わせた小論文】 目標：大学入試レベルの小論文を書く力をつける
	10月 著者と語る講演会 統一テーマに関する著者を招いて、全校生徒対象の講演会を実施 事前に関連資料を読み、問題意識をもって講演を聴く 実行委員会を作り、生徒主体の活動とする	※12月までの活動	
	11月～1月 テーマを選択→書籍を読み要約→共有	論文の書き方を学ぶ→グループで共有	
	冬期休業 課題図書に関するレポート	課題図書に関する論文作成	
	1月 次年度の分野希望調査	次年度の分野希望調査	

図3 「思索と表現」の主なテーマ(2015年度)

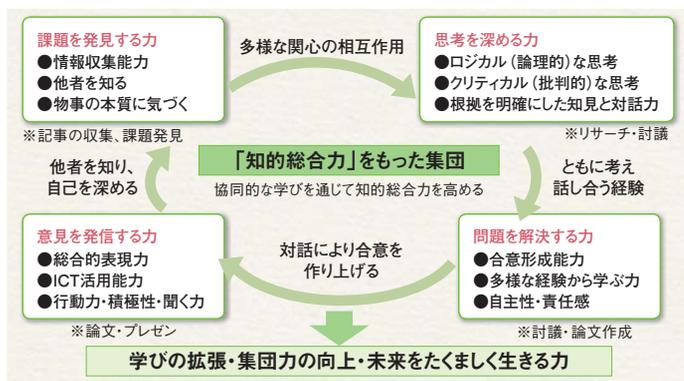
学校統一テーマ「グローバル化の中の地域創生」		
大テーマ	中テーマ(予定) (教室単位：40人程度)	小テーマ (班単位：4～6人)
A「グローバルな社会における豊かな地域づくり」	「智頭町の村おこし運動」「環日本海交流の活性化」など	中テーマからさらに班ごとで小テーマを設定 ※全49テーマ
B「持続可能な社会と環境」	「鳥取砂丘から生まれた乾燥地農業―世界へ」「日本海のメタンハイドレート開発」など	中テーマからさらに班ごとで小テーマを設定 ※全45テーマ
C「グローバル化の中の人間と科学」	「世界をリードする鳥取の技術―センサー技術」「地位の伝統文化と多文化共生」など	中テーマからさらに班ごとで小テーマを設定 ※全58テーマ

One Point 効果を高める指導のコツ

大学・企業・海外の学校との連携

2学年・3学年合同のグループが150以上にも分かれ、研究のテーマもその数にのぼる。そのため、生徒たちが考えたテーマによっては担当教員の専門を超えるケースもある。それに対応するため、鳥取大学の教員、学生を招聘して生徒たちに専門的なアドバイスをもらったり、発表会での評価を受けるなどのサポート体制を敷いている。また、オーストラリアや韓国の提携校の学生・生徒たちとスカイプでセッションを行ったり、地元企業から講師を呼ぶなど、課題の設定や視野の広げ方、研究の深化のためにも多様な人々との交流の場を設けている。

図1 鳥取西高校の総合学習の考え方



「思索と表現」の活動を通して、生徒たちの変化が始めているという。

生徒の自発性・主体性が育ち、教員にも変化の兆しが出ている

「生物オリピックやT・甲子園など、学校外の活動にどんどん出ていくようになってきました。班活動で協同性を発揮している学年ほど、進学率も上がっているように感じます」(山本先生)

「海外の提携校との交流に、以前は関心の高い特定の生徒だけが参加していましたが、今は多くの生徒が参加するようになりました」(林先生)

「生徒の主体性が如実に上がっています。我々の知らないうちに、鳥取市を活性化させるためのフリーペーパーを作成して、た生徒たちもいます。課題をみつけたら、解決するための手法や、落としどころにたどり着くまでの流れが身についていて、再体験できたのだと思います」(川原先生)

さらに「思索と表現」の時間を充実させるために、教員自身のネットワークや探究力をあげる必要があると先生たちは考えている。

先生たち自身に変化の兆しが見られる同校の取り組みに今後も期待したい。

「ESDの研修で会ったアメリカの先生方も地域の問題をグローバルなテーマとするために模索して、連携先を探していました。授業を開発する教員自身もどんどん外に出て情報を得たり、人とのつながりを作っていくかなければならないと痛感しました」(林先生)

「生徒たちは型にはまらず、教科書の枠を超えたいと思っています。それに対して教員はどれだけの資源をもち得ているかが問われています。教員自身が教科書を超えたり、学校や教科書外の資源をもつていられるのか、それらの資源と資源を俯瞰しながらつなぎ合わせることでできるか。教員自身がさまざまな人々と協同することで、生徒に学び合いのきっかけを提供できるのだと思います」(川原先生)